

棟高西新堀遺跡

—住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019

株式会社シン技術コンサル
高崎市教育委員会

例　　言

1. 本書は住宅建設工事に伴い実施された、「棟高西新堀遺跡」(高崎市遺跡番号 751) の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の所在地は、群馬県高崎市棟高町字西新堀 622 番地 1 他である。
3. 発掘調査は、平成 30 年 11 月 12 日から平成 30 年 11 月 30 日まで実施した。
4. 発掘調査および整理作業は高崎市教育委員会の指導・助言及び監督のもと、土地所有者から委託を受けた株式会社シン技術コンサルが実施した。
5. 調査体制は以下の通りである。

高崎市教育委員会

株式会社シン技術コンサル 小林一弘（調査担当）、松田秀貴（測量担当）

6. 本書の編集は、小林・馬渢恵美子（シン技術コンサル）が行った。執筆は、第 1 章を高崎市教育委員会、それ以外を小林が行った。
7. 本調査における図面・写真・出土遺物は、高崎市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査参加者・整理作業参加者については、以下の通りである。（敬称略・五十音順）
＜発掘作業参加者＞
青山真佐子、大村美枝子、小林久重、高橋勇太、藤永友子
＜整理作業参加者＞
池田敏雄、坂本勝一、佐藤久美子、鈴木澄江、樋口安奈

凡　　例

1. 本書掲載の第 1・3 図は国土地理院発行 1/50,000 地形図『前橋』・『榛名山』、第 2・14 図は高崎市発行 1/2,500 都市計画基本図、第 4 図は国土地理院発行 1/25,000 地形図『前橋』・『下室田』を改変・使用した。
2. 遺構平面図に示した方位は座標北であり、水準線は標高を示す。座標については世界測地系に基づく平面直角座標第 IX 系を使用した。
3. 土層および遺物の色調は『標準土色帖』(農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所 23 版)による。
4. 本書における遺構種類の略号は、SI= 壓穴建物跡である。
5. 本文・土層注記で表記されるテフラ名を以下に記す。

As-A	=	浅間 A 軽石	1783 (天明 3) 年降下
As-B	=	浅間 B 軽石	1108 (天仁元) 年降下
As-C	=	浅間 C 軽石	4 世紀初頭頃降下
Hr-FA	=	榛名二ツ岳火山灰	6 世紀初頭頃降下

6. 遺物番号は遺構図・遺物実測図・観察表・写真図版において共通のものを用いた。
7. 本書に掲載した遺構図の縮尺率はそれぞれの図面に明記した。遺物実測図・写真的縮尺率は 1/3 である。

目 次

例 言	
凡 例	
目 次	
第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 調査の方法と経過	2
第Ⅲ章 遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第Ⅳ章 基本層序	6
第Ⅴ章 検出された遺構	8
第1節 積穴建物跡	8
第2節 遺構外出土遺物	13
第Ⅵ章 まとめ	14
写 真 図 版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 棟高西新堀遺跡位置図	1	第8図 SI1出土遺物図	9
第2図 調査区位置図	2	第9図 SI2平・断面図	10
第3図 遺跡周辺の地形	3	第10図 SI2カマド平・断面図	11
第4図 周辺の遺跡	5	第11図 SI2出土遺物図(1)	11
第5図 基本土層柱状図	6	第12図 SI2出土遺物図(2)	12
第6図 調査区全体図	7	第13図 遺構外出土遺物図	13
第7図 SI1平・断面図	8	第14図 棟高遺跡西部模式図	14

挿表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	5	第4表 出土遺物観察表(3)	13
第2表 出土遺物観察表(1)	9	第5表 出土遺物観察表(4)	13
第3表 出土遺物観察表(2)	12		

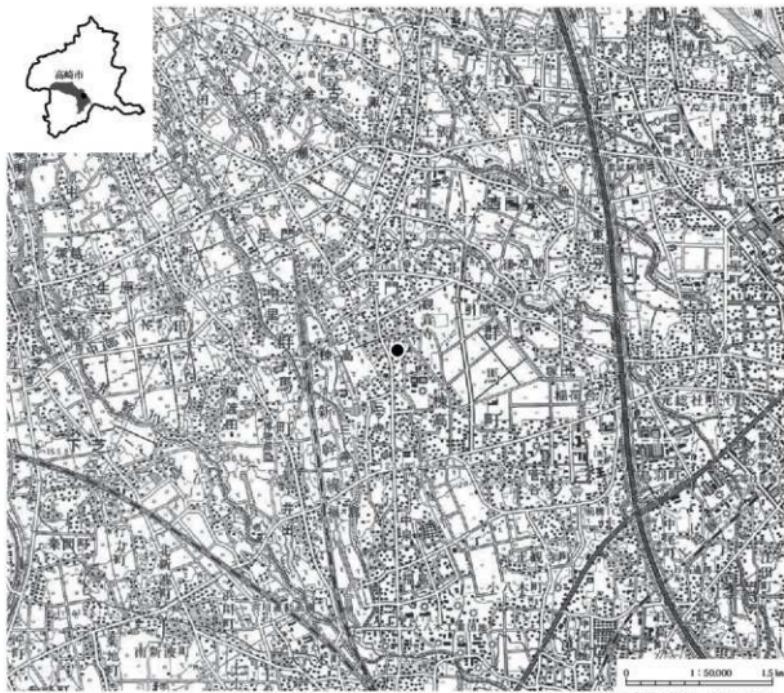
写真目次

PL.1	調査区遠景(南東から) 調査区全景(上が北)	SI2 カマド(西から) SI2 断面A(南から)
PL.2	1区完掘全景(南から) 2区完掘全景(南から)	SI2 断面C(西から) SI2 カマド掘り方断面(西から)
	SI1 完掘(西から)	SI2 掘り方(西から)
	SI1 断面(北東から)	基本土層断面(南から)
	SI2 完掘(西から)	深掘りトレンチ断面(東から)
PL.3	SI2 遺物出土状況(北西から)	PL.4 SI1出土遺物、SI2出土遺物、遺構外出土遺物

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成30年8月、土地所有者および工事主体者から、高崎市棟高町において計画している長屋住宅建設に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である棟高遺跡群に隣接するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年8月29日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、同年9月14日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、古代の竪穴建物跡を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「棟高西新堀遺跡」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に準じ、平成30年10月30日に土地所有者と民間調査機関株式会社シン技術コンサル北関東支店との間で契約を締結、また同日に土地所有者・株式会社シン技術コンサル北関東支店・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督することとなった。



第1図 棟高西新堀遺跡位置図

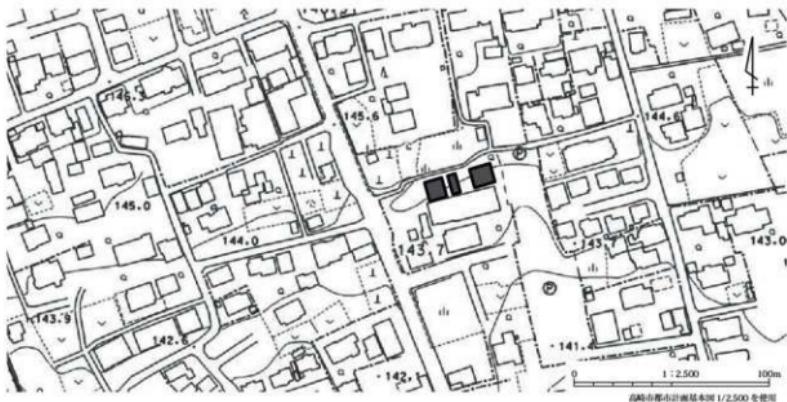
第Ⅱ章 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、3箇所の調査区に対して行った。調査区は、住宅建設工事予定地のうち試掘調査で遺構が確認された箇所を中心に設定した。調査区は東西方向に並んでおり、西から1区・2区・3区と呼称した。各調査対象地の面積は、1区が56m²、2区が27m²、3区が70m²で合計153m²である。調査区内の表土は、重機によって遺構確認面直上まで掘り下げた。その後ジョレンなどを用いて人力で精査し、遺構の確認を行った。遺構確認の結果、古代の竪穴建物跡を2軒検出した。

竪穴建物跡は、移植ゴテなどを使用して掘削作業を行った。遺構は、計測・写真撮影による記録を行った。遺構計測作業は、トータルステーションを用いた器械測量と写真測量を併用した。写真撮影は、35mmモノクロネガ・同カラーリバーサルの2種類のフィルムを使用し、2416万画素のデジタル一眼レフカメラを併用した。また、遺構の完掘状態をラジコンヘリコプターによる空中写真撮影で記録した。調査終了後は、高崎市教育委員会の終了確認検査を受け、埋め戻し・器材撤収を行い、現地調査を終了した。

平成30年

- 11月12日 近隣挨拶、外周安全柵設置。重機搬入。
- 11月13日 重機による表土掘削。仮設トイレ設置。
- 11月14日 表土掘削、土山整形、重機搬出。器材搬入、人力による発掘調査開始。
- 11月15日 遺構確認、1・2号建物掘削開始、遺構測量基準点設置。
- 11月19日 1号建物完掘、全景撮影。
- 11月22日 2号建物完掘、全景撮影。
- 11月26日 平面計測、空撮準備。高崎市教育委員会による現地調査の終了確認検査。
- 11月27日 ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影。2号建物カマド掘り方掘削・計測・撮影。
- 11月28日 仮設トイレ撤去。
- 11月29日 器材搬出。
- 11月30日 重機搬入、埋め戻し、重機搬出。外周安全柵撤去、現地調査終了。



第2図 調査区位置図

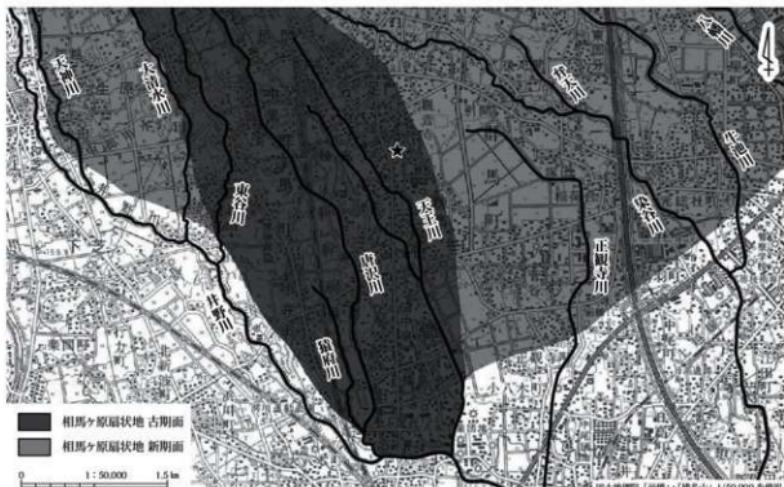
第Ⅲ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

高崎市は、関東平野の北西端からその奥の山地にかけて位置し、市域の西端部の鼻曲山は長野県境である。ここを源流とする烏川は高崎市を北西から南東に貫流し、高崎市域のほとんどは烏川とその支流の流域に含まれる。高崎市の地形は、西半部と南部が山地・丘陵で占められ、北東部の烏川以北には高崎・前橋台地の平坦面が広がる。前橋台地の北側は榛名山を給源とする火山性堆積物によって広く覆われている。このうち、高崎市北東部から榛東村・吉岡町・前橋市的一部にかけての範囲は、「相馬ヶ原扇状地」と呼ばれる火山山麓の裾野扇状地である。扇頂は標高約600mの榛東村と高崎市の境界付近で、扇端は高崎市から前橋市にかけて、標高110mの等高線付近に形成されている。扇状地上には12本程の中小河川が放射状に流れ、このうち白川の上流と井野川が南西側の、牛王頭・駒寄川が北東側の扇側となる。扇状地面は形成時期により新期・古期の2面に分けられ、本遺跡は14,000～13,000年より前に形成された古期扇状地面上に位置している（第3図）。

本遺跡地の標高は140m程度であり、北東1,300mには染谷川が、南西200mには天王川が、それぞれ南東流している。両河川間には相馬ヶ原扇状地の新旧面の境界があり、この東西で地形の変換がみられる。本遺跡周辺は尾根状の地形を呈し、調査区の東100m程を走る稜線に向けて緩やかに高まっており、広く宅地として利用されている。一方、新旧境界線の東側では奈良・平安時代の洪水によって埋没した谷地が榛高遺跡群の発掘調査で検出されており、ここより南東側には低平な水田域が広がっている。また、正觀寺川の水源でもある。

本遺跡は榛名山・浅間山山由来の火山噴出物（Hr-FA、As-A、As-B、As-C）の降下範囲内に位置しているが、いずれのテフラも調査区内に純層の堆積はみられず、耕作などにより搅拌されたものと考えられる。



第3図 遺跡周辺の地形

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺では、縄文時代以降の各時期の遺跡が確認されている。本遺跡では縄文時代の遺構・遺物は検出されていないが、東方へ200m離れた棟高遺跡群内の棟高東新堀遺跡1(2)では、中期後半の建物が、棟高辻の内遺跡(3)では埋甕が確認されている。この他には上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡(22)、三ツ寺II遺跡(33)、保渡田VII遺跡(39)で前期から中期の、鳥羽遺跡(23)で晚期の遺構が確認されている他、北谷遺跡(14)の谷地では晚期の遺物が出土している。

弥生時代については、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡で中期の遺構が検出されている他、西三社免遺跡(10)、小池遺跡(11)で中期の遺物が出土している。後期は棟高辻久保遺跡(8)、正銀寺遺跡群(24)、三ツ寺II遺跡などの湧水地帯周辺で集落が確認されている。

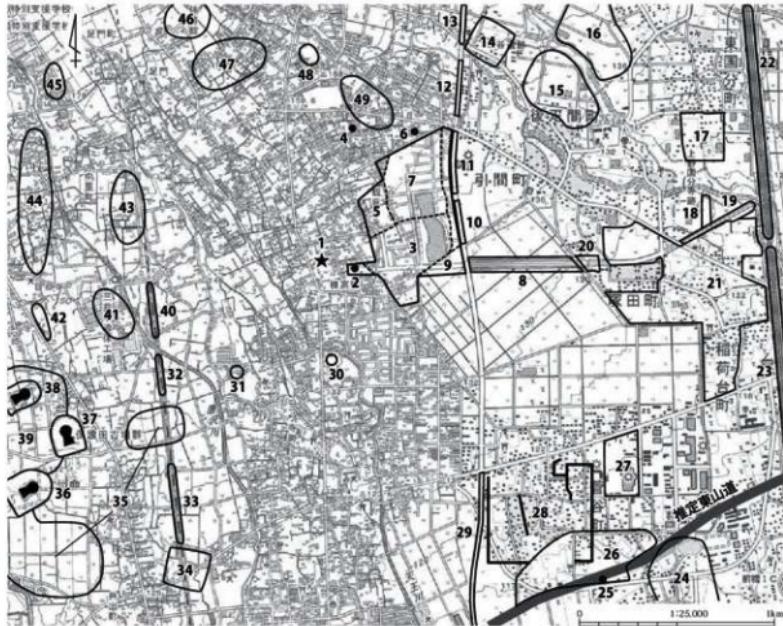
古墳時代の集落は西三社免遺跡、小池遺跡、元総社西川遺跡(18)、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、鳥羽遺跡、保渡田VII遺跡などで前期の、小八木志志貝戸などで中期の、棟高水窪遺跡3(7)、棟高辻久保遺跡、西三社免遺跡、小池遺跡、諏訪西遺跡(12)、冷水村東遺跡(13)、後疋間遺跡群(15)、西国分遺跡群(16)、国府南部遺跡群(21)、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、鳥羽遺跡、棟高南八幡街道遺跡2(30)、三ツ寺III遺跡(32)、保渡田遺跡(40)、などで後期のものが検出されている。集落以外では、前期には棟高南寝暮窪遺跡3(5)で4世紀の方形周溝墓が、後期の5世紀後半には井出二子山古墳(36)、保渡田八幡塚古墳(37)、保渡田薬師塚古墳(38)の大型前方後円墳が保渡田古墳群に、終末期には毘沙門古墳群(43)、足門村西古墳群(45)、鶴巻古墳群(47)、棟高北寝保窪古墳群(49)などの群集墳が7世紀後半をピークとして築かれた。保渡田古墳群より南東方向へ700m程の猿川沿いには、同古墳群の被葬者とみなされる豪族の居館である三ツ寺I遺跡(34)があり、また、北東へ3km程離れた染谷川沿いにも類似する居館跡の北谷遺跡が確認されている。尚、6世紀初頭の榛名山二ツ岳の噴火を契機にこれらは廃絶し、この周辺では集落数の減少がみられる。生産遺構についてはHr-FA降下前後の遺構を中心に多く調査されており、棟高東新堀遺跡1、棟高辻の内遺跡IV・5・7、棟高南寝暮窪遺跡3・4、棟高水窪遺跡3・4、菅谷石塚遺跡(29)などで畠跡が、井出地区遺跡群(35)などで水田跡が確認されている。

奈良時代の集落遺構は、棟高東新堀遺跡1、棟高水窪遺跡II・4、西三社免遺跡、小池遺跡、諏訪西遺跡などで調査されている。本遺跡から東方向へ3.2km程の図幅外には上野国府が築かれ、付属施設である上野国分僧寺(17)、国分尼寺が建立された。これら国府関連施設の運営に伴い、この周辺では集落が増加するが、棟高遺跡群などでは減少する。

平安時代の集落は棟高辻の内遺跡IV・5・7、棟高南寝暮窪遺跡3・4、棟高水窪遺跡II・3・4、棟高辻久保遺跡2(9)、棟高南八幡街道遺跡2などで調査されている。他に、9世紀後半以降に整備されたとされる東山道国府ルートが高貝戸遺跡(25)や、図幅外の福島飛地遺跡で調査されている。生産遺構は1108(天仁元)年降下のAs-B下で多く検出されており、周辺では棟高辻久保遺跡で水田が確認されている。

中世の遺構としては、菅谷城跡(28)の他、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡で小見廐寺が調査されている。

近世になると本遺跡地西側に三国街道が整備された。この他に、太平洋戦争末期には本遺跡の南東方向1kmに前橋飛行場が造られ、付属施設が棟高辻久保遺跡で調査されている。



第4図 周辺の遺跡

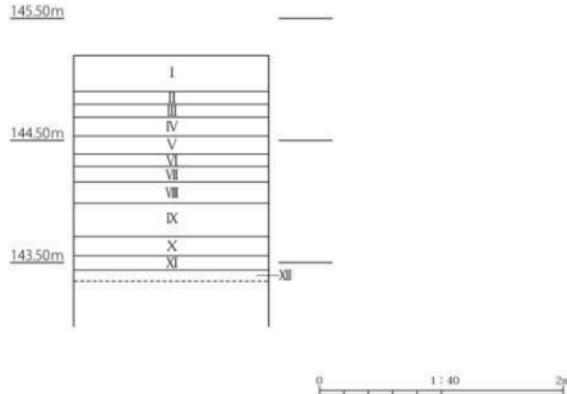
第1表 周辺の遺跡一覧表

%	遺跡名	主な時代
1	桜高西面遺跡	奈良、平安
2	桜高東面遺跡 1 (桜高跡跡)	鐵文、古墳～奈良
3	桜高北山内遺跡、同遺跡Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ～Ⅶ (桜高跡跡)	古墳～平安
4	桜高南面遺跡	鐵文、古墳～近世
5	桜高南面遺跡Ⅱ、同遺跡Ⅲ・Ⅳ (桜高跡跡)	古墳
6	桜高寺古墳跡	鐵文、古墳～近世
7	桜高古墳跡 2、同遺跡 3・4 (桜高跡跡)	古墳～平安
8	桜高丘久保跡	弥生後～近代
9	桜高丘久保跡 2 (桜高跡跡)	弥生～近世
10	西三社前遺跡	古墳～平安
11	小池跡	鐵文、古墳後～平安、中世
12	諏訪内遺跡	鐵文、古墳後～平安、中近世
13	冷水井遺跡	古墳後～中世
14	北谷遺跡	古墳後 (陪塚)
15	後定岡遺跡群	古墳後～平安
16	内四谷分遺跡群	鐵文、弥生、古墳後～近世
17	上野町分遺跡	奈良、平安 (寺跡跡)
18	元鶴見内川遺跡	古墳～中世
19	元鶴見内川・堺田中原遺跡	古墳～中世
20	引間六石遺跡	奈良、平安～中近世
21	国府南面遺跡群	鐵文、古墳～中近世
22	上野岡寺・尼寺・牛込中間地域遺跡	鐵文～中近世
23	鳥羽遺跡	古墳～中近世
24	正願寺跡跡群	弥生など
25	高日ノ遺跡 (櫛定丸山)	奈良、平安 (道路)

%	遺跡名	主な時代
26	菅谷地C遺跡群	鐵文、古墳～中近世
27	菅谷地E遺跡群	平安
28	菅谷跡	中世 (陪塚)
29	菅谷河遺跡	古墳、平安、中世
30	桜高上六郷街道遺跡、3号遺跡 2	古墳～奈良、平安、中世
31	堤上遺跡	古墳後～平安
32	三ツ寺北遺跡	古墳後～平安
33	三ツ寺北遺跡	鐵文、弥生後～平安
34	三ツ寺I遺跡	古墳後 (陪塚)
35	井出山遺跡群	鐵文、古墳後～平安、中近世
36	井出山古墳 (保瀬田古墳群)	古墳後 (前方後円墳)
37	保瀬田古墳群 (保瀬田古墳群)	古墳後 (前方後円墳)
38	保瀬田古墳群 (古墳)	古墳後 (前方後円墳)
39	保瀬田古墳跡	鐵文、古墳、中世
40	保瀬田古墳	古墳後～平安
41	保瀬田古墳跡	古墳跡～平安
42	健昌寺跡	古墳跡～平安、中世
43	足砂山古墳群	古墳跡 (陪塚地)
44	星敷古墳群	古墳跡 (陪塚地)
45	記門橋古墳群	古墳跡 (陪塚地)
46	寺尾寺・墓・藤原道跡	古墳前～平安
47	鎌谷古墳群	古墳跡 (陪塚地)
48	東久佐古墳群	古墳跡 (陪塚地)
49	桜高北窓保存古墳群	古墳跡 (陪塚地)

第IV章 基本層序

本遺跡では、I～XII層の基本土層を確認した。I層は厚さ30cm程の表土である。II層は旧耕作土である。III・IV層は白色軽石と焼土粒・炭化物を含む黒褐色シルト層で、V層はIV層に比べ粘性が強く、IV層は軽石が比較的多く含まれる。V・VI層は白色軽石(As-C)を含むシルト層で、V層は黒色、VI層は黒褐色である。調査ではV層の上面を遺構確認面とした。VII層はVI層に類似する土層であるが白色軽石を含まない。VIII層はにぶい黄褐色シルト層である。IX層は同色の粘質シルトが半固化しており、今回調査した竪穴建物跡の床面を構成している。X層は褐色シルト層で酸化鉄が沈着する。XI層は砂質シルトに亜円礫が多量混じる。XII層は細粒砂層でラミナ状の堆積がみられる。

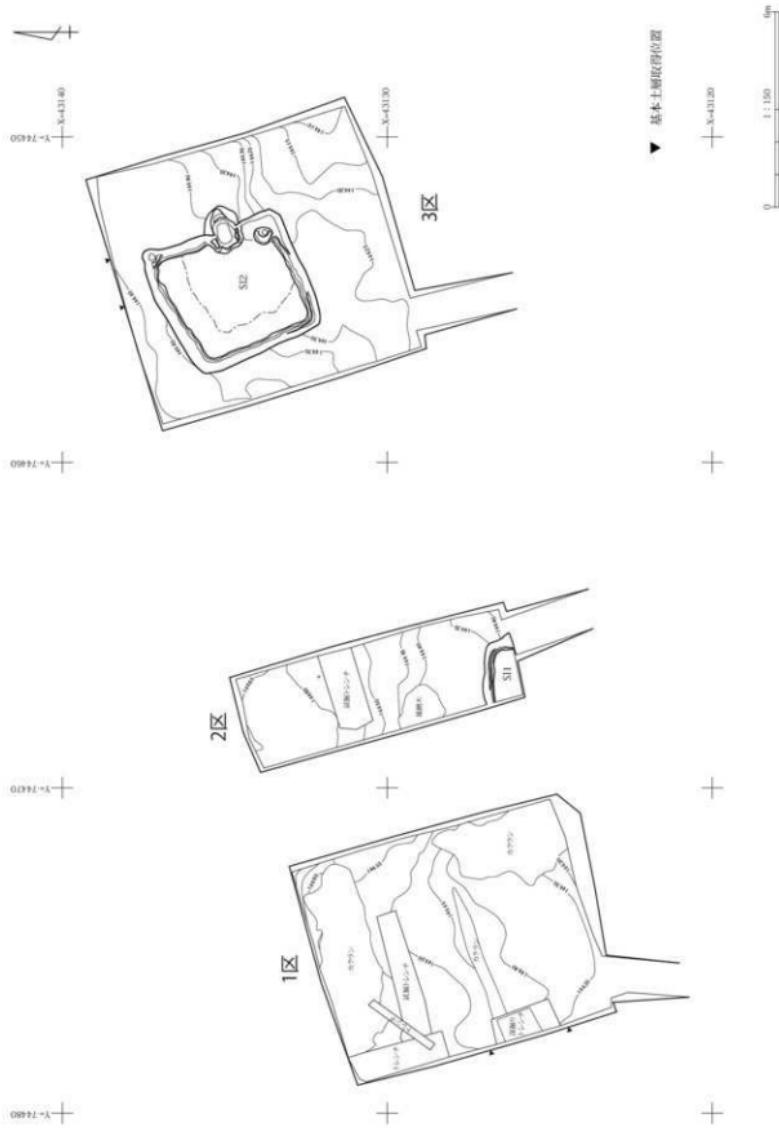


基本土層

I 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト	粘性弱、練まり弱。表上。灰褐色軽石の細粒を多量含む。
II 黒褐色 (10YR2/2) シルト	粘性弱、練まりあり。灰褐色軽石の細粒を少量含む。旧耕作土。
III 黒褐色 (10YR2/2) 粘質シルト	粘性弱、練まりあり。白色軽石を少量、焼土・炭化物を微量含む。
IV 黒褐色 (10YR3/2) シルト	粘性弱、練まり弱。白色軽石を多量、燒土を少量、炭化物を微量含む。
V 黒色 (10YR2/1) シルト	粘性弱、練まりあり。白色軽石(As-C)を少量含む。
VI 黒褐色 (10YR2/2) シルト	粘性弱、練まりあり。白色軽石(As-C)を微量含む。
VII 黒褐色 (10YR3/2) シルト	粘性弱、練まりあり。
VIII にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	粘性弱、練まりあり。IX層上ブロックを少量含む。
IX にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質シルト	粘性弱、練まり極強。半固化。
X 褐色 (10YR4/4) シルト	粘性弱、練まり強。酸化鉄沈着。
XI 褐色 (10YR4/4) 砂質シルト	粘性なし、練まり弱。亜円礫(直徑5～40mm)を多量含む。酸化鉄が少量沈着。
XII 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂	粘性なし、練まりなし。ラミナ状堆積。

第5図 基本土層柱状図

第6図 調査区全体図



第V章 検出された遺構

本遺跡で検出された遺構は、竪穴建物跡(SI)2軒である。2区で1号建物跡(SI1)が、3区で2号建物跡(SI2)がそれぞれ検出された。SI1は北東の隅部分のみが検出されたため、カマド・柱穴などの施設は不明である。SI2は全体が検出された。両建物跡の間隔は約11mである。遺物は、建物跡内から土師器・須恵器・鉄製品などが出土した他、2区北部を中心IV層中から土師器・須恵器が出土した。

第1節 竪穴建物跡

SI1(第7・8図、図版2・4)

位 置 2区の南西端で検出された。重複遺構は無い。

形狀・規模 建物の北東角部分のみの検出だが、平面形は隅丸方形を呈すものと考えられる。各辺の検出長は、北辺が2.0m、東辺が0.9mである。主軸方向は、北辺がN-89°-Eと、ほぼ東西を指す。壁の高さは50cm程、面積は1.9m²である。

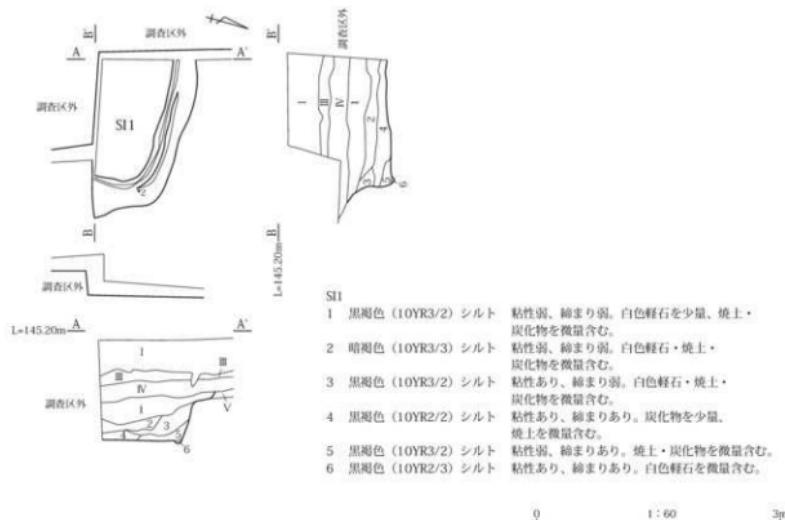
覆 土 白色軽石・焼土・炭化物を含む黒褐色シルトを主体とする。

床 面 明瞭な貼床や掘方が確認できなかったため、IX層を平らに掘り下げて、直床にしていたものと考えられる。

壁 周 溝 北・東壁面の下で検出された。北側の一部では壁から離れて構築されている。

遺 物 土師器の壺・甕、鉄製品が出土しており、このうち、2点を図示した。1は土師器の甕である。口縁部は直線的に外傾し肩部より張り出す。2は刀子と考えられる鉄製品である。

時 期 遺構の時期は、出土遺物の特徴から、8世紀後半頃と考えられる。



第7図 SI1 平・断面図



第8図 SI1 出土遺物図

第2表 出土遺物観察表(1)

SII

掲載 年	種別 基準	出土 位置	計測値(cm・g) 残存 色調(外側・内側)/焼成	地質	特徴・調整・文様等
1	土師器 甕	SI1	口:(18.0) 高:(5.9) 瓶:— 口縁一部(1/6) 外:褐色 内:褐色・良好・酸化鉄	雲母	外:口縁～瓶部ヨコナデ。瓶部ヘラケズリ。 内:口縁～瓶部ヨコナデ。瓶部ヘラナダ。
2	鐵製品 刀子	SI1	長:10.7 中:1.4 厚:0.3 重:10.6 筆折柄	—	

SII (第9~12図、図版2・3・4)

位 置 3区中央で検出された。重複遺構は無い。

形狀・規模 平面形は方形を呈す。各辺の長さは、北辺が4.4m、東辺が4.5m、南辺が3.9m、西辺が3.9mである。主軸方向はN-65°-Eと、東北東を指す。但し、北壁はN-58°-Eであり、東側が若干外側へ拡がっている。壁の高さは北側が40cmと高く、南側は36cmである。面積は17.9m²である。

覆 土 白色軽石・焼土・炭化物を含む黒褐色シルトを主体とする。

床 面 IX層を平らに掘り下げた直床と考えられる。建物中央部から南東部にかけて約2.8m×2.9mの方形の範囲では、床面が特に硬化しており、北・西壁際とは使用状況が異なっていたものと考えられる。

柱 穴 北東の壁際に1基検出された。柱穴の規模は、直径40cm、深さ12cm程度であった。

カ マ ド 東壁の中央南寄りで検出された。燃焼部の中央が建物の東壁付近に位置し、壁外に張り出して造られている。壁内には袖部が残存するが、天井部は残存しない。カマドの奥行きは130cmで、袖の長さは南側が47cm、北側が37cmである。焚口の幅は48cm、火床は長軸100cm、短軸70cm程度で、建物床面より16cm程度低くなっている。燃焼部の奥壁は10cm程度の高さで緩やかに立ち上がり、煙道部が長さ30cm程度残存する。燃焼部の側壁は一部強く焼けており、覆土(13層)中には焼土塊を多量に含む。

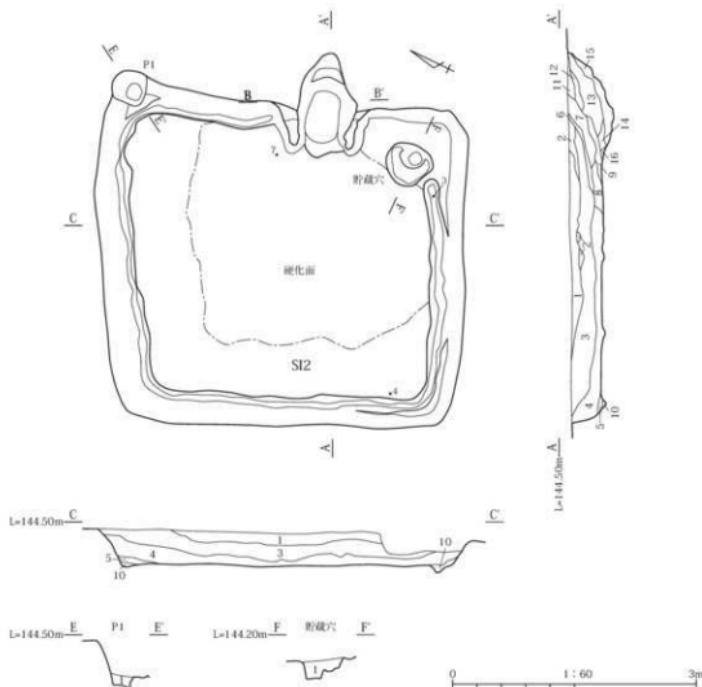
貯 藏 穴 建物南東隅で検出された。平面形状は円形で直径50cm、深さ24cmである。

壁 周 溝 カマドと貯藏穴の付近を除く壁際で検出された。

遺 物 須恵器の壺蓋・壺・長頸壺、土師器の壺・甕などが出土しており、特に土師器の甕の破片が建物中央から東側の床面付近に集中していた。これらの土器のうち、11点を図示した。3は須恵器の壺蓋で、硯に転用されている。4は須恵器の長頸壺の口縁から頸部である。3・4は壁際の床面上10cm程度で出土した。5・6は土師器の壺で、5は内側に放射状の暗文がある。7~13は土師器の甕である。7は短い口縁が直立し、わずかに外傾する。これ以外

の8～13は形状が似通っているが、肩の張りと頸部の屈曲が10・11は大きく、8・9・12・13は比較的小さい。土師器の壺は底部や胴部下方の破片も出土しているが、全体を復元するには至らなかった。

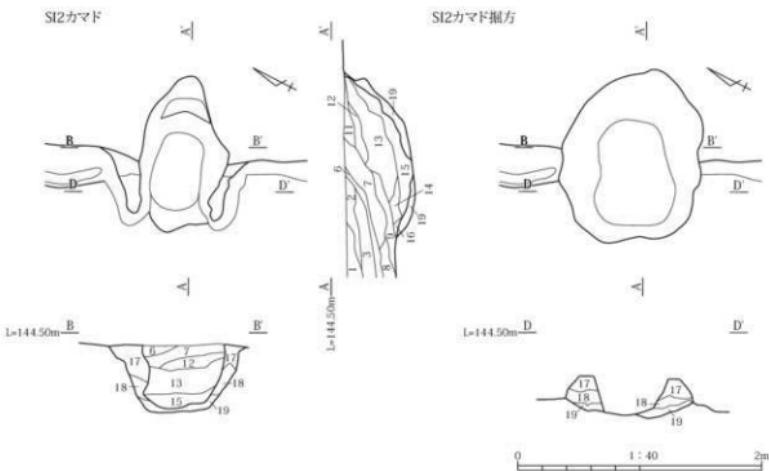
時 期 遺構の時期は、出土遺物の特徴から、8世紀後半頃と考えられる。



SI2

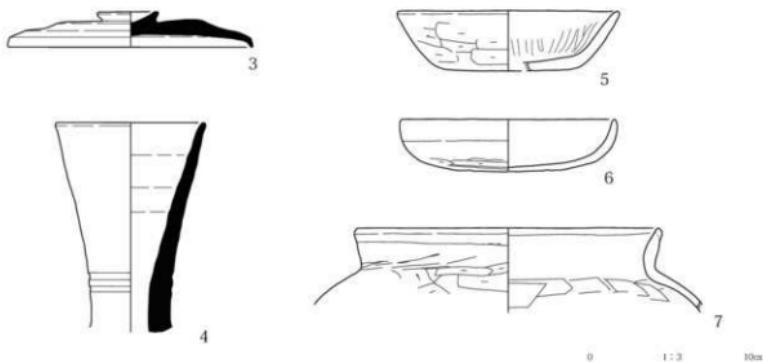
- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト 粘性弱、縮まり弱。白色軽石を少量。焼土を微量含む。
- 2 にふい黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト 粘性あり、縮まりあり。白色軽石・焼土ブロック (直径5～10mm程)・暗褐色粘土ブロック (直径5～30mm程)を少量、焼土・炭化物を微量含む。
- 3 黒褐色 (10YR3/1) シルト 粘性弱、縮まり弱。白色軽石を少量、黒色土を斑状に少量、焼土を微量含む。
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト 粘性弱、縮まり弱。白色軽石を少量、焼土を微量含む。
- 5 黒褐色 (10YR3/2) シルト 粘性弱、縮まり弱。薄層土を斑状に少量含む。
- 6 黒褐色 (10YR3/2) シルト 粘性弱、縮まり弱。白色軽石を少量、焼土・炭化物を微量含む。
- 7 暗褐色 (10YR3/3) シルト 粘性弱、縮まり弱。白色軽石を少量、焼土を微量含む。
- 8 暗褐色 (10YR3/4) 粘質シルト 粘性弱、縮まり弱。暗褐色粘土ブロックを多量、焼土ブロック (直径5～10mm程)を少量、白色軽石・焼土を微量含む。
- 9 暗褐色 (10YR3/3) シルト 粘性弱、縮まり弱。焼土ブロック (直径5～10mm程)・焼土を少量、白色軽石・炭化物を微量含む。
- 10 黒褐色 (10YR2/2) シルト 粘性弱、縮まり弱。周溝埋土。
- 貯藏穴 粘性弱、縮まり弱。焼土・白色軽石を微量含む。
- P1 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト 粘性弱、縮まり弱。薄層土 (直径5～10mm程)を少量含む。

第9図 SI2 平・断面図

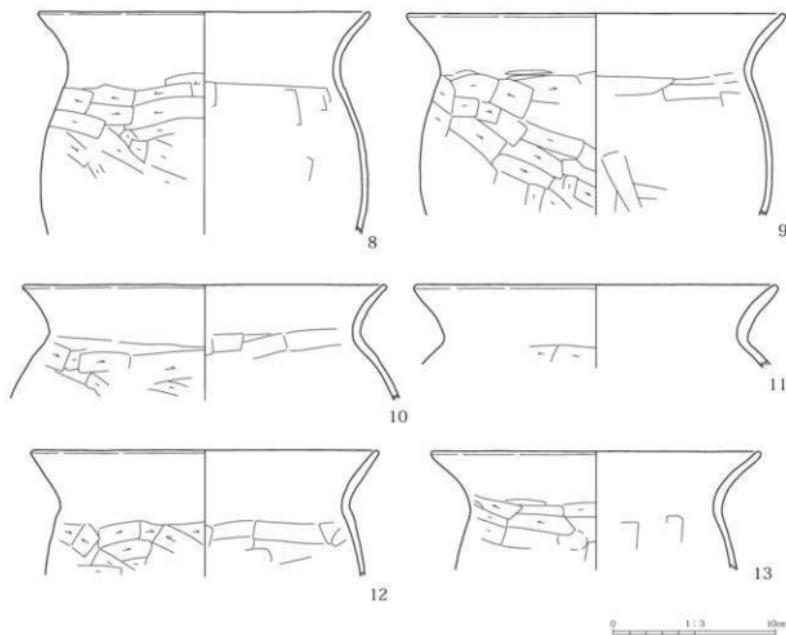


- 11 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質シルト
12 暗赤褐色 (5YR3/2) シルト
13 暗赤褐色 (5YR3/4) シルト
14 黒褐色 (10YR2/2) シルト
15 暗赤褐色 (5YR3/2) シルト
16 黒褐色 (5YR2/2) シルト
17 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト
18 黑褐色 (10YR2/2) シルト
19 黑褐色 (10YR3/2) シルト
- 粘性あり、締まりあり。暗褐色粘土ブロックを多量、白色軽石・焼土を微量含む。
粘性弱、締まり弱。焼土・炭化物を微量含む。
粘性なし、締まり弱。焼上・ブロック（直径 5 ~ 30mm 程）を密に、焼土を多量、炭化物を少量含む。
粘性弱、締まり弱。灰・炭化物を少量含む。
粘性弱、締まり弱。焼土を少量、灰・炭化物を微量含む。
粘性弱、締まりあり。灰・炭化物を少量含む。
粘性あり、締まりあり。焼上・白色軽石を微量含む。
粘性弱、締まり弱。焼土を少量、灰・炭化物を微量含む。
粘性弱、締まり弱。焼上・ブロック（直径 5 ~ 30mm 程）を密に、焼土を多量、炭化物を微量含む。カマド下構築上。
粘性弱、締まり弱。焼上・ブロック（直径 5 ~ 10mm 程）・焼土を少量、白色軽石・炭化物を微量含む。カマド構築上。
粘性弱、締まり弱。焼土・炭化物を微量含む。カマド構築上。

第 10 図 SI2 カマド平・断面図



第 11 図 SI2 出土遺物図 (1)



第12図 SI2出土遺物図 (2)

第3表 出土遺物観察表 (2)

SI2

掲載 No.	種別 器種	出土 位置	計測値 (mm・g) 色調 (外側・内側) / 構成	胎土	特徴・調整・文様等
3	調査器 环蓋	SI2	口: 14.9 高: 2.2 つまみ径: 3.8 ほぼ完形 外: 茶灰色 内: 茶灰色／良好・還元焰	黒色粒、 云母。	ロクロ成形。つまみ取付。転用版。
4	調査器 長脚壺	SI2	口: (9.0) 高: (12.9) 底: — 口輪～腹部 (1/6) 外: 灰色 内: 灰色／良好・還元焰		ロクロ成形。内外面自然釉。
5	土師器 环	SI2	口: (13.4) 高: (8.4) 底: (8.4) 口輪～腹部 (1/6) 外: 明黄褐色 内: 明黄褐色／良好・酸化焰	云母。褐鉄 云母。	外: 口輪部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内: 口輪～底部ヘラミガキ。口輪部・底面部。
6	土師器 环	SI2	口: (13.0) 高: 3.2 底: — 口輪～腹部 (1/4) 外: 柿色 内: 柿色／良好・酸化焰	云母	外: 口輪部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内: 口輪部ヨコナデ。体～底部ナデ。
7	土師器 壺	SI2	口: (18.4) 高: (5.3) 底: — 口輪～腹部 (2/5) 外: 柿色 内: 柿色／良好・酸化焰	云母、砂、片岩 云母、砂、片岩	外: 口輪部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内: 口輪部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。
8	土師器 壺	SI2	口: (20.2) 高: (13.7) 底: — 口輪～腹部 (2/5) 外: 柿色 内: 柿色／良好・酸化焰	云母	外: 口輪～颈部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内: 口輪～颈部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。
9	土師器 壺	SI2	口: (23.0) 高: (12.4) 底: — 口輪～腹部 (1/5) 外: 明赤褐色 内: 明赤褐色／良好・酸化焰		外: 口輪部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内: 口輪部ヨコナデ。胴部ヘラナデ・ナデ。

第4表 出土遺物観察表(3)

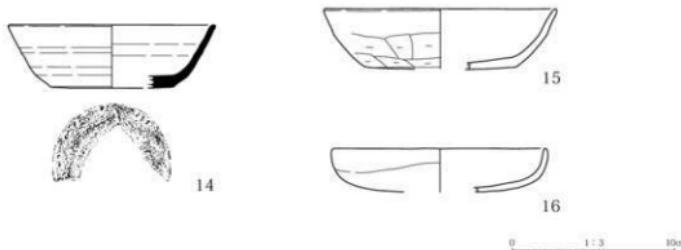
S2

規範 No.	種別 器種	出土 位置	計測値 (cm・g) 現存 色調 (外側・内側) / 燐成	胎土	特徴・調整・文様等
10	土師器 甕	S2	口:(22.2) 高:(7.1) 底:— 口縁～肩部 (2/5) 外: 棕色 内: に赤・褐色 / 良好・酸化焰		外: 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ・ナデ。
11	土師器 甕	S2	口:(22.0) 高:(5.1) 底:— 口縁～肩部 (1/5) 外: 棕色 内: 棕色 / 良好・酸化焰	云母	外: 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内: 口縁～肩部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。
12	土師器 甕	S2	口:(21.2) 高:(7.8) 底:— 口縁～肩部 (1/6) 外: 棕色 内: 棕色 / 良好・酸化焰	云母	外: 口縁～肩部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。 内: 口縁～肩部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。
13	土師器 甕	S2	口:(20.0) 高:(7.3) 底:— 口縁～肩部 (1/7) 外: に赤い褐色 内: に赤い褐色 / 良好・酸化焰	云母	外: 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ・折オサエ。 内: 口縁～肩部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。

第2節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物（第13図、図版4）

調査区内のIV層を中心に須恵器・土師器の破片が出土し、特に2区の北側に集中していた。これらのうち3点を図示した。14は須恵器の環の破片、15・16は土師器の環の破片である。遺物の時期は、いずれも8世紀後半頃と考えられる。



第13図 遺構外出土遺物図

第5表 出土遺物観察表(4)

遺構外

規範 No.	種別 器種	出土 位置	計測値 (cm・g) 現存 色調 (外側・内側) / 燐成	胎土	特徴・調整・文様等
14	須恵器 環	2区 IV層	口:(12.6) 高:3.8 底:7.6 口縁～底部 (1/2) 外: 黄褐色 内: 黄褐色 / 良好・還元焰		ロクロ形成。底部外周回転ヘラケズリ。
15	土師器 環	1区 IV層	口:(14.2) 高:(3.7) 底:(9.2) 口縁～底部 (1/4) 外: 棕色 内: 棕色 / 良好・酸化焰		外: 口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。
16	土師器 環	2区 IV層	口:(13.0) 高:(2.7) 底:— 口縁～底部 (1/5) 外: 棕色 内: 棕色 / 良好・酸化焰	角閃石	外: 口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ。体～底部ナデ。

第VI章　まとめ

今回の調査は 153m²の狭小な調査範囲内での限定的なものであり、検出された遺構は竪穴建物跡 2 軒のみである。どちらの建物も出土遺物から 8 世紀後半頃の遺構と考えられるため、同一の集落を構成していたものと考えられる。本遺跡の近接地では、これまでに発掘調査が行われていないため、集落の広がりについては不明である。但し、本遺跡の東方 300 m に位置する棟高遺跡群では同時期の遺構が検出されており、本遺跡と何らかの関連があった可能性がある。棟高遺跡群では、92ha の土地区画整理事業対象区域内で広範囲にわたって発掘調査が行われた。この調査で検出された遺構は 7 ~ 9 世紀の集落と畠を中心とし、竪穴建物跡は 7 世紀代が主体で 8 世紀代のものは数が限られる。同遺跡群では中央南西寄りに奈良～平安時代の洪水によって埋没した谷地が検出され、谷地とその縁辺部では 8・9 世紀の竪穴建物跡がほとんど検出されておらず、谷地によって集落が東西に分断されている。ここでは、同遺跡群のうち本遺跡により近い谷地の西側（南寝暮窪遺跡 3、同遺跡 4、辻の内遺跡Ⅲ、同遺跡 6・7、東新堀遺跡 1）について、竪穴建物跡の分布を概観する。

谷地の西側では竪穴建物跡が 63 軒検出されており、このうち時期が特定できた遺構は 54 軒である。内訳は、7 世紀が 43 件と最も多く、9 世紀が 9 軒、8 世紀は 2 軒だけである。各時期の竪穴建物跡の検出位置は、7 世紀は東新堀遺跡 1 と南寝暮窪遺跡 3 を除く全域に散在していたが、8 世紀には東新堀遺跡 1 のみとなり、9 世紀は南寝暮窪遺跡 4 の南西部、南寝暮窪遺跡 3 の西部、辻の内遺跡 7 の北西部だけとなる。谷地及びその周辺へ洪水層の堆積が行われていた 8・9 世紀代の竪穴建物跡は、谷地から西側へ 100 ~ 250 m 程離れた範囲で検出されている。この範囲は相馬ヶ原扇状地の古面に含まれ、東側の新面に比べて標高が高く、洪水の影響が及ばないところから集落域となっていた状況が窺える。

棟高遺跡群の谷地の西側で唯一 8 世紀の竪穴建物跡が検出された棟高東新堀遺跡 1 は、棟高遺跡群の西端に位置しており、本遺跡からは東南東方向へ約 200 m の距離にある。同遺跡では、8 世紀代の竪穴建物跡が 21 m の間隔をおいて 2 軒検出されている。この 2 軒は本遺跡の SI2 と同様に東壁にカマドが構築されている。また、主軸方向はどちらも約 N-82°-E で本遺跡の SI1 と近いなど、両遺跡の竪穴建物跡には共通点がみられるものの、これらの建物跡が同一集落の範囲に含まれていたのかは不明である。今後の調査事例の増加によって更なる知見が得られることを期待したい。

主要参考文献

- 高崎市文化財調査報告書第 224 号 『棟高遺跡群（棟高水窪Ⅱ・棟高辻の内Ⅳ遺跡）』 2008 高崎市教育委員会
- 高崎市文化財調査報告書第 306 号 『棟高遺跡群 1』 2013 高崎市教育委員会
- 高崎市文化財調査報告書第 362 号 『棟高遺跡群 2』 2016 高崎市教育委員会
- 高崎市文化財調査報告書第 384 号 『棟高遺跡群 3』 2017 高崎市教育委員会
- 高崎市文化財調査報告書第 399 号 『棟高南八幡街道遺跡 2』 2018 高崎市教育委員会
- （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 314 号 『青葉上岸敷跡 金子北十三町遺跡 2』 2003 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団



第 14 図 棟高遺跡西部模式図

写 真 図 版



調査区遠景（南東から）



調査区全景（上が北）



1区完掘全景（南から）



2区完掘全景（南から）



SI1 完掘（西から）



SI1 断面（北東から）



SI2 完掘（西から）



SI2 遺物出土状況（北西から）



SI2 カマド（西から）



SI2 断面 A (南から)



SI2 断面 C (西から)



SI2 カマド掘り方断面（西から）



SI2 挖り方（西から）



基本土層断面（南から）



深掘りトレンチ断面（東から）



1



2

SI1 出土遺物



3



4



5



7



8



9



10



11



12



13

SI2 出土遺物



14



15



16

遺構外出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ムナタカニシニイボリイセキ
書名	棟高西新堀遺跡
副書名	住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第428集
編著者名	小林一弘
編集機関	株式会社シン技術コンサル
所在地	〒370-1135 群馬県佐波郡玉村町板井311-1
発行年月日	2019年3月29日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ムナタカニシニイボリイセキ 棟高西新堀遺跡	高崎市棟高町字西 新堀622番地1他	102024	751	36° 23' 20"	139° 0' 0"	2018.11.12 ~ 2018.11.30	153m ²	住宅建設 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
棟高西新堀遺跡	集落	奈良時代	竪穴建物跡	土師器・須恵器・ 金属製品	
要約		高崎市棟高町に位置し、奈良時代の集落の一部が検出された。遺構は竪穴建物跡を2軒確認した。この他に遺物包含層中より古代の土器が出土した。			

棟高西新堀遺跡

—住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成 31 年 3 月 28 日 印刷

平成 31 年 3 月 29 日 発行

編集／株式会社シン技術コンサル

群馬県佐波郡玉村町板井 311-1 電話 0270-65-2777

発行／高崎市教育委員会

群馬県高崎市高松町 35 番地 1 電話 027-321-1291

印刷／細谷印刷有限会社
